

## 当麻町内で瀬川守さんを「偲ぶ会」 有機農業界のリーダーとして活躍

### ■6次産業化も推進した「でんすけすいか」生みの親を追悼

若い頃には「でんすけすいか」の生みの親として奔走し、90年代以降は北海道の有機農業運動の屋台骨となり、1月7日に71歳で他界した農業生産法人「当麻グリーンライフ」代表の瀬川守さんを偲ぶ会が7月30日、当麻町内で開かれた。有機農業の活動などを共にした10人が呼びかけたもので、親交のあった50人余りが訪れ、その生涯を悼んだ。



有機トマトを作り、加工事業も手がけた故・瀬川守さん(20年夏)

瀬川さんは、旭川農業高校を卒業後、70年代には青年活動に奔走し、半世紀にわたり農業に従事。83年に農協青年部の仲間たちと「でんすけすいか」の栽培に乗り出し、当麻町の特産品に育て上げた。農家と契約した消費者に対して直接販売できる特別栽培米制度が87年に創設されると、いち早く研究会を立ち上げリーダーとして活躍。98年には、生産から加工・販売まで手がける「当麻グリーンライフ」を設立した。

90年代前半から米や野菜の有機栽培に取り組み、新たな販路の開拓にも乗り出す。21世紀になると、有機JAS認証を取得し、トマトジュースなどの加工事業も始める一方、外食産業のワタミとも提携。道内初の有機認証団体の理事をはじめ、北海道有機農業研究会や当麻有機農業推進協議会の代表などを務めた。

数年前から時おり体調不良を訴え、

昨年4月の参議院農林水産委員会で有機農業の推進に向けた意見陳述をしたのが最後の活動になった。

「偲ぶ会」の冒頭、呼びかけ人代表で空知管内北竜町の農業、黄倉良二さん(元きたそらち農協代表理事組合長・84歳)が追悼の言葉を述べた。

「有機農業の基本は、平和を祈りながら戦争と災害のない、健康で暮らせる村を創ること。『子どもたちの生命を守るためにどうすればいいのか』が瀬川さんの最後の思いであり、有機農産物の学校給食を実現しようとした。(日本の有機農業界に)研究者は多いが、実践者は少ない。彼の遺志を引き継ぎ、少しでも実践者を増やす努力をしていきたい」

当麻グリーンライフが製造したトマトジュースや甘酒で「献杯」。テーブルには有機野菜を使った料理が並んだ。瀬川さんが登場する、種子や有機農業の大切さを描いたドキュメンタリー映画や、参院での意見陳述の記録も上映された。

「北海道食といのちの会」代表の久田徳二さん、「有機農業推進法」の制定に関わった農水省OBの栗原眞さんも、瀬川さんの人柄に言及しながら故人の足跡を偲んだ。



「有機農業の実践者を増やしたい」と、追悼の言葉を述べる黄倉良二さん

筆者との最初の出会いは28年前、当麻町内で開催された「食糧問題フォーラム」の実行委員会。その後も、有機農業の取材では何度も協力してもらい、ずいぶん教えられた。「俺は尖っていたから…」が口癖で、行政や農協にやり方には歯に衣着せぬ人でもあった(本誌20年8・9月号のインタビュー記事を参照)

自宅近くの田畑や山林を「有機の里」にする道を模索し、「山羊か羊を飼いたい」と夢を描いた。5年前、誘われて一緒に十勝管内の山羊牧場を見学したこともある。その夢を果たすことなく旅立ってしまうとは思ってもよらず、残念でならない。

(ルポライター・滝川康治)